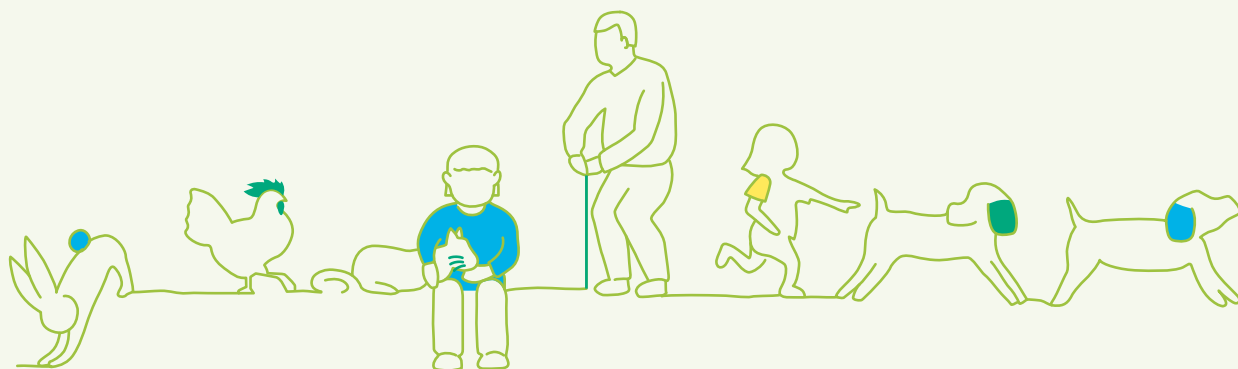


Asian Society for Animal-assisted Education and Therapy

動物介在教育・療法学会 ニューズレター

No. **27** / 2026 春



人・動物・環境をつなぐ One Health



CONTENTS

- 2 巻頭言
- 3-5 杉並区の地域猫の不妊去勢事業を利用した One Health アプローチ
- 6-7 ASAET アカデミーの報告および参加者レビュー
- 7 前期 ASAET アカデミー予告
- 8-10 研究のための最低基準
- 11 第 19 回学術大会予告
- 12 編集委員会から / 編集後記

人と動物と自然界の健やかさ

ASAET理事長
土田あさみ

新年度はすでに始まっていますが、無事に2026年度を迎えられましたのはひとえに会員の皆さまのご協力あってのことと、あらためてお礼申し上げます。当学会は規模の小さな団体で、会員みなさまの顔がわかる団体ともいえます。本年もみなさまとお会いできるのを楽しみにしております。

さて「健康」とはどういう状態を指すのでしょうか。WHO憲章の定義では「健康とは、肉体的、精神的及び社会的に完全に良好な状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」（<https://www.who.int/about/governance/constitution>、訳：公益社団法人日本WHO協会<https://japan-who.or.jp/about/who-what/charter/>）とあります。これは人体を対象にした健康の定義です。人の健康にかかわる感染症制圧の観点からはOne Healthという概念があります。人の健康は動物の健康をはじめ、それらの生息環境を提供する植物をも含む自然界の健全性につながっている、とする考え方です。人における感染症の多くは人獣共通感染症（Zoonosis）であり、人社会の防疫だけで防ぐのは不可能で、同時に動物世界における防疫も進めていくべき問題なのです。つまり、医師や獣医師などの専門家だけでなくペット飼育者を含む一般の人々も共に取り組むべき課題である、ということです。

自然界の健全性といえば、すでにヒトの活動によって危機的状況に陥っていると言われて久しいです。開発による環境破壊の危機、人の働きかけが縮小したことによる里山荒廃という危機、外来生物や外来種あるいは人為的に改変された生物が人によって持ち込まれて生ずる危機、地球温暖化による危機など、自然界はすでに青息吐息かもしれません。近年では毎年各地で自然災害が起こっており、自然界は私たち人が安心して暮らせる安定した環境でなくなりつつあると身をもって感じているところです。星新一の、穴に小石を投げて、それが後で空から落ちてくるストーリーを、ぞっとしながら思い起こしています。

私たちの健康は、生命現象の有無に限らない、地球上にあるあらゆるものにつながっている！今年度も引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

ASAET

いぐさ動物病院
畑 孝

杉並区の 地域猫の 不妊去勢事業を 利用した One Health アプローチ

One Healthという言葉をご存じだろうか。One World One Health、人間と家畜・家禽・ペットを含む動物と環境（自然界）は密接な関係にあり、世界は繋がっており、人の健康を考える時、動物や環境の健康も同時に考えなければ達成することはできないという概念を表している。

開拓による自然環境の破壊や地球温暖化などの影響により、人間社会と自然界の垣根が無くなり、野生動物と人が近くなり過ぎてしまい、野生動物の中で蔓延していた伝染病が人へとひろがるようになってきた。また人の行動の多様化、交通手段の目覚ましい発展による膨大な人と物の移動により、種の壁をこえて人に感染した病原体があつという間に全世界に広がってしまうことを我々はコロナウイルスによって痛感した。

そのような状況の中で近年、猫におよそ60%の致死率をもたらすSFTS（重症熱性血小板減少症候群）という伝染病の猫での発生件数が増えるのと同時に人での感染数も増加しており、特に小動物獣医療関係者の感染リスクが最も高く、とうとう亡くなられた獣医師が出たことで、我々獣医師の間ではホットな話題となっている。

このウイルスは本来、九州を中心とした西日本の伝染病であるが、関東へと北上していることが報告されている。これはマダニの吸血により伝搬する感染症であるが、ネコ科動物に感受性が高く、厄介なことに猫

だけでなく犬や人にも感染する人獣共通感染症（動物由来感染症）の1つだ。最近では感染した犬や猫から人への感染も報告がされており、感染動物を診察する我々、獣医師はマスク、グローブ、ガウンだけでなくフェイスシールドあるいはゴーグルまでのPPE（Personal Protective Equipment：個人用防護具）をするように指示されている。幸い、コロナのように飛沫や空気感染するような伝染病ではなく、主にはマダニに噛まれるあるいは感染動物の体液に接触することにより感染するためパンデミックになる可能性はかなり低い。犬ではおよそ40%、人では27%と致死率が高い伝染病なので、ペットに関わる人達は知っていた方が良いでしょう。

このSFTSウイルスはニホンジカやアライグマなどの野生動物の間で蔓延しており、九州から北海道の28自治体で捕獲されたニホンジカのSFTSV抗体陽性率は24%と報告され、SFTSの人への感染リスクは全国的にあり、野生動物内での感染がある程度、増加すると人への感染がおこりはじめるとされている（spillover）。温暖化によりベクターであるマダニの活動・繁殖が活発になり、西日本を中心にみられていたこの感染症が北上および東進しているのだ。

東京は地方と異なり野生動物がいないから心配ないと思われがちであるが、森林などが少ないにもかかわらず、東京都区部でも徐々にハクビシン、アライグマなどの目撃情報が増加していることが分かっている。東京都環境局のHPを見てみるとアライグマ、ハクビシンの捕獲頭数と捕獲場所が多摩地区の方から都心部へと分布域が拡大してきている。野生動物が人の生活圏に侵入してくると、それら野生動物がマダニをその地域に運びこむこととなる。最近では、野鳥が遠方にマダニを運ぶことも知られてきているし、特にアライグマはecological boosterの役割を果たしていることも分かってきた。そしてそのマダニがそこにいる野良猫に寄生することとなる。

SFTSの通常の主な感染経路としては、人が防護不十分な服装で山に入ってマダニに噛まれることで感染もしくは、山に入って感染した野生動物に接触することで人への感染が成立するのだが、野生動物が人の生活

東京都獣医師会杉並支部の活動の紹介

圏に侵入してくるようになると、侵入した野生動物と人の直接的な接触の機会も増えるかもしれないが、先ずは人の生活圏で暮らしている野良猫に感染するだろう。猫は人とより近い関係にある為、特に地域猫の保護活動をおこなっているボランティアの人達のリスクが高くなるので注意が必要となる。地域猫の保護活動は都会ほど活発におこなわれている印象を受ける。都会ではぐったりとしている野良猫がいて、地域猫のボランティア活動をされている方々に直ぐに発見されて、ただちに動物病院に運ばれる可能性が高くなる。また地域猫にエサやりなどをおこなっている方もいるので啓蒙活動も重要となる。

前置きが長くなったが、東京都獣医師会杉並支部（以後、杉並支部）の活動の1つである「飼い主のいない猫事業」をご紹介させていただくと、杉並支部では2004年より地域猫活動として行政（杉並保健所）、地域ボランティア（杉並どうぶつ相談員）と協力して区内の野良猫の数のコントロールをおこなっている。近年、200頭前後の地域猫のTNR（Trap-Neuter-Release）活動をおこなうようになっていたが、その効果が出始めたのか地域猫の数の減少がみられ、2023年度は100頭になり、2024年度は86頭、そして2025年度は手術頭数が42頭と急激に減少している（図1）。

TNR活動の文献を調べるとおよそ15年程度で猫の頭数の減少が報告されているので、東京の区部でも同様な傾向なのかもしれない。

杉並区は、TNR活動だけでなく、2025年度より保護・譲渡（TNTA）活動にも補助金を支給するようになった。TNTAとはTrap-Neuter-Tame-Adoptの頭文字で、捕獲した野良猫を避妊去勢手術はもちろん、血液検査などの健康チェックをおこない病気があればそれを治療し、ある程度、人馴れさせてから新しい飼い主を見つけ、リリースを出来るだけしないという活動だ。23区では既に千代田区、豊島区をはじめいくつかの区が実施していると聞いている。

通常のTNR活動は、ボランティアが猫の捕獲器（図2）を野外に設置して捕獲し、捕獲器に入れたまま動物病院に持ち込むので、ボランティアは直接、猫に触れることはまずない。第一、健康な野良猫はまるで小さな猛獣のようでとても触ることなどできないのだ。ところが、SFTSに感染すると猫は急速に状態が悪化する。猫における致死率が60%と非常に高く平均死亡日数が3日なので、ぐったりとした状態で動物病院に運び込まれることが多く、治療の甲斐もなく2～3日で亡くなるというのが、SFTSに感染した多くの猫が辿る経過だ。このことはぐったりしている猫は特にSFTS感染を疑う

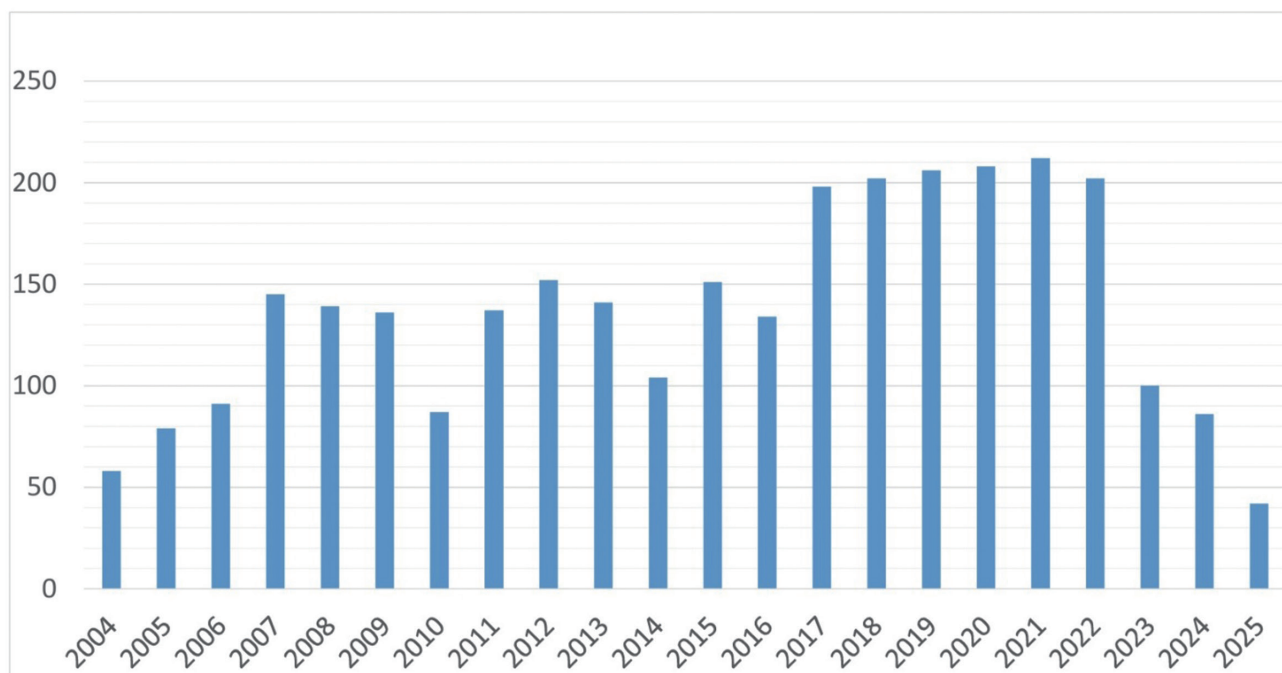


図1 東京都獣医師会杉並支部「飼い主のいない猫事業」TNR頭数の推移（年間）



図2 猫の捕獲器

必要があることを示している。捕獲器をつかわずとも簡単に捕まる状態になっているので、発見した人がSFTSの知識を持っていないと、PPEなしで猫に直接、触れてしまいがちな為、この時に猫の体液に触れる可能性があり、保護した人が感染してしまうリスクが生じる。地域猫などの活動が活発な都市部にこの伝染病が広がると、都市部の方がぐったりした猫は発見され易く保護され易いかもしれない。野良猫へのエサやりやボランティア活動をおこなっている区民・市民の方への感染が危惧されるところだ。

そこで、我々、杉並支部は、2021年に杉並保健所に許可を貰い、国立感染症研究所の前田健先生の協力のもと協力11動物病院から集めた杉並区内の外猫142頭（地域猫101頭と外に出る飼い猫41頭）における重症熱性血小板減少症候群（SFTS）ウイルスに対する抗体保有状況調査（ELISA）を実施した。幸い、この時点ではSFTSウイルスに対する抗体を持っている猫は1頭もいなかった。

このSFTSの調査を定期的におこなうことで、杉並区の地域猫のSFTSの状況を知ることができ、ボランティア活動を安心して実施することができると考えている。感染症や有毒物質の環境中での存在あるいはその程度を評価するためにおかれる動物のことを「センチネルアニマル（歩哨動物）」という。

野良猫や地域猫活動は多くの地域でおこなわれている。現状では、これらは猫による苦情対策、猫の殺処分を減らす、QOL向上を主目的として猫の頭数制限のためだけに実施されているが、One Healthの観点から、

地域の実情に応じてSFTSをはじめとする人獣共通感染症（動物由来感染症）のモニタリングも組み入れていくことができれば、今後この活動はより公衆衛生的な意義を持たせることができ、まさにOne Healthアプローチとなりより有意義なものになるのではないだろうか

【参考資料】

- 国立健康危機管理研究機構感染症情報提供サイト
「日本国内における SFTS 発症イヌ、ネコの報告数（2017 年～2024 年、2024 年 12 月 31 日現在）」
「感染症発症動向調査に届け出られた SFTS 症例の発病年月（n=1,173, 2025 年 7 月 31 日現在）届出開始日（2013 年 3 月 4 日）以前に発病した 8 例、発病年月の記載のない 10 例を除く」
<https://id-info.jihs.go.jp/risk-assessment/severe-fever-with-thrombocytopenia-syndrome/20240801/index.html>（最終閲覧日 2026.3.20）
- 東京都環境局 HP
「東京都のアライグマ・ハクビシンの被害及び対策の状況について」https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/nature/-animals_plants/raccoon/raccoon
（最終閲覧日 2026.3.20）
- 白藤梨可、八田岳士、中尾亮、島野智之。（2024 年）
「マダニの科学」朝倉書店
- 「杉並区の地域猫における重症熱性血小板減少症候群ウイルスに対する抗体保有状況調査の取組 ―地域猫の不妊去勢事業を利用した One Health アプローチ―」
畑 孝、平良雅克、石嶋慧多、前田 健、日獣会誌 76
262～266（2023）

ASAETアカデミーの報告 および参加者レビュー

2025年度後期ASAETアカデミーの報告

濱野佐代子（日本獣医生命科学大学）

このたび、アカデミーにおいて、発表の機会をいただきました。本発表では、まずペットロスの概説を行い、人と動物との関係性における喪失の悲嘆の心理過程について説明しました。続いて、動物介在サービスの基本的な定義と介在動物について解説しました。

そのうえで、介在動物との別離（死別を含む）に際して生じる課題を取り上げ、グリーフケアの必要性について問題提起を行いました。特に、対象者に対してどのように別れを伝えるかという点は重要であり、伝え方そのものや、配慮が必要な対象者への対応について検討しました。例えば、認知症のある方、障害のある方、幼児など、それぞれの理解や受け止め方に応じた丁寧な関わりの必要性が示唆されました。

また、対象者のメンタルケアに加え、ハンドラー（飼い主）自身の心理的負担にも目を向ける必要があります。介在動物との別れは、ハンドラーにとっても深い喪失体験であり、所属団体としてど

のような支援体制を整えるかが課題となります。さらに、活動に関わる援助者にとっても、介在動物との別離に伴う心理的影響は無視できず、支援する側のケアの重要性についても言及しました。

談話会では、参加者相互の情報交換を通じて、実践に基づく多様な視点が共有されました。フロアからは、獣医療に従事されている方や、動物介在サービスを実践されている方々から貴重なご意見をいただき、現場における具体的な対応や課題について理解を深めることができました。

本発表を通して、動物介在サービスにおける「別離」をどのように支えるかという視点は、今後ますます重要になると感じております。今後も実践と研究を重ねながら、よりよい支援のあり方を模索していきたいと考えています。

最後に、このような貴重な機会をいただきました関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

2025年後期ASAETアカデミーに参加して

学校法人青丹学園 関西学研医療福祉学院 作業療法学科
専任教員 池田沙弥香

今回のアカデミーに参加して、テーマにある『動物介在動物と別れるとき』『介在動物との別離に対するハンドラー・対象者・援助者のこころの準備』という言葉は、思考に感情が伴い、さらには受け取る側の置かれた状況や経験による視点や解釈が加わることでより深まり、広がると感じました。前年度の後期

アカデミーは、『動物介在療法を行うために』『終末期医療について知ろう・考えよう』というテーマを通して動物のことも学んだ作業療法士として愛犬と一緒に勤務した8年間に思いを馳せる機会でした。そして、今回は愛犬との出勤の延長線にあった別れを整理する時間となりました。

濱野先生よりペットロスやグリーフケアの概念とともに動物との関係性と喪失の関連についてお聞きし、その人にとって動物がどれだけ大事だったかを慮ることの大切さを再認識することができました。また、動物を亡くした後の自分を責める気持ちは愛情と責任の裏返しであるというお話は本当に印象的で、私達がペットの命を預かって全責任を担うからこそその心の在り方なのだという事に気づきました。そして、意見交換や茶話会では、獣医師として学校動物や動物園動物に関わる先生方のお話から人と動物の別れの視点を増やすことができ、参加者の方の家族の一員である愛犬・愛猫のお話をお聞きすることで看取る過程やその経験値にも目を向けることができました。

私は大学で動物を学んだ経験から適性や出勤へのモチベーションをみて愛犬の働き方を調

整し、作業療法士としての臨床経験と看取り学を学んだ経験から医療従事者は“回復”や“生きる”だけでなく“亡くなるまでどう生きるか”にも携わることを学生に伝えてきました。その中で学生への愛犬の死の伝え方は迷いましたが、愛犬からの手紙という形で一緒に学校生活を送ってくれたことへの感謝を綴り、死因となった疾患の解剖学的な情報等も伝えて愛犬を通して学びを深めてほしいこと、医療従事者の卵としての成長に愛犬との出会いを活かしてほしいという思いを添えたことで教育者としての役割は果たせたのではないかと思います。そして、それは私自身の愛犬との別れの受容のための作業でもあったのだと振り返っています。そのように思える機会をいただいたアカデミーでお会いした皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

2026 年前期 ASAET アカデミー

「One Health」をご存じですか?～ヒト、動物、環境の健康を～（仮称）

One Health(ワンヘルス)とは、「人の健康」「動物の健康」「環境の健全性」を相互に関連する一つの健康として捉え、一体的に守っていくという包括的なアプローチで、
人獣共通感染症や薬剤耐性（AMR）対策において、
医師・獣医師・環境専門家が分野の垣根を越えて連携・対処する考え方です。
講演後、談話会で意見交換を行います。

講師 ----- 畑 孝 氏（いぐさ動物病院 院長）

会場 ----- 国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟414

日時 ----- 2026年7月4日受付13:15 ～、講演13:45 ～ 16:00

参加 ----- 対面・リモートともに無料

（どちらも要申込、リモートは講演のみ）

＊オンデマンド配信はありません

申込は学会HP（<https://asaet.org/spread/>）から



研究のための最低基準

野瀬 出（日本獣医生命科学大学）

IAHAIO (International Association of Human-Animal Interaction Organizations) のホームページにおいて、『Minimum standards for research in AAS/HAI/HAB (AAS/HAI/HABにおける研究のための最低基準)』が公開されました (<https://iahaio.org/minimum-standards-for-research-in-aas-hai-hab/>)。この文書の内容は『動物介在教育・療法学会雑誌』に論文を投稿する際にも参考になると思われるので、重要なポイントを絞って紹介します。なお、実際の文書にはより詳細な情報が含まれていますので、研究を実施する際には上記 URL からダウンロードのうえ、一読することをお勧めします。

作成の目的

動物介在サービス (Animal-Assisted Services: AAS) や人と動物の相互作用 (Human Animal Interaction: HAI)、人と動物の絆 (Human Animal Bond: HAB) に関する研究は増加していますが、研究の質のばらつき、用語の不統一、研究方法の偏り、動物福祉への配慮不足、学術分野間の分断などの問題も指摘されてきました。

「研究のための最低基準」の策定により、さまざまな効果が期待されます。まず、人と動物の福祉やウェルビーイングの向上に加え、研究デザインや方法の明確化によって研究間の比較がしやすくなり、再現性や透明性の向上が見込まれます。その結果、研究の質が高まり、実践に資する知見の蓄積が進むと考えられます。さらに、用語の統一により学際的な連携が促進され、資金調達や社会政策への影響も期待されます。

point 1

研究方法

研究の実施にあたっては、研究課題に適した方法を選択することが求められます。これまで、実証的研究方法としてはランダム化比較試験 (Randomized Controlled Trial: RCT) が重視される傾向にありました。RCTは、参加者を実験群と統制群にランダムに割り付け、実験群のみに介入を行うことで、その効果を検証する方法です。

しかし、実践場面では、参加者数の制約や条件統制の困難さなどから、RCTの実施が難しい場合も少なくありません。本基準ではRCTを過度に重視するのではなく、研究課題に応じた方法の選択が推奨されています。量的研究 (RCT) に加え、質的研究 (観察、インタビューなど) や混合研究を適切に使い分けることが重要です。

point 2

人と動物の福祉

第二のポイントは、人と動物の福祉の向上です。人に対しては、研究参加にあたりインフォームド・コンセントを得る必要があります。参加は自発的であること、途中で辞退できること、個人情報保護されることなどについて説明します。同意能力を欠く対象者 (乳幼児や判断能力が低下している者) の場合には、代理人 (保護者など) から同意を得ます。また、参加者だけではなく、研究実施者や動物のハンドラー、協力者、見学者などの福祉にも配慮する必要があります。

本基準では、動物に対しても「同意」を得ることを求めています。当然ながら、動物から言葉による同意を得ることができないため、行動を注意深く観察し、動物がその場から離れようとしていたり、緊張していたり、嫌がるそぶりを見せた場合は「参加したくない」というサインであると捉えます。動物自身が参加するかどうかを選ぶことができ、参加を拒否する場合は、それを尊重します。また、動物への福祉はAAS実施時のみならず、日常的な飼育環境においても確保されていなければなりません。

研究開始前には研究倫理審査を受けることが望ましいですが、研究機関に所属していない場合は審査を受けることが難しいです。その場合には、第3者に意見を求めることが推奨されています。

point
3

研究体制

研究チームは、多様な分野の専門家により構成される必要があります。人の心や体のことを理解する専門家だけでなく、動物の行動や健康に詳しい専門家も欠かせません。専門家は関連資格を有し、かつ継続的な研修を受けていることが求められます。日本においては、人の専門家として医師、看護師、作業療法士、理学療法士、公認心理師など、動物の専門家として獣医師、愛玩動物看護師などが該当します。AAS研究の実施には学際的な連携が不可欠であり、多様な専門性をもつ人々が協働することで、安全で信頼できる研究が可能となります。

point
4

結果の公表

研究結果は正確に公表される必要があります。研究方法を詳細に記述することで、他の研究者による追試が可能となり、再現性が担保されます。また、期待された結果だけでなく、ネガティブデータや問題が生じた場合についても報告することが求められます。こうした情報共有により、どのような状況で効果が現れやすく、どのような状況で効果が現れにくいのが明確になり、研究および実践の質向上につながります。学術雑誌に論文を投稿する際には、無料で閲覧可能なオープンアクセスジャーナルの活用が望まれます。専門家だけでなく、実践者や一般の人々に向けても情報を発信することが重要です。

AAS の定義

本基準では、さまざまな用語の定義も示されています。昨年、ASAET アカデミーでも取り上げましたが、動物介入介入（Animal-Assisted Interventions: AAI）という用語を動物介入サービス（Animal-Assisted Services: AAS）に変更することが提案されました。その後、正式な定義について記されたIAHAIO白書が公開される予定になっていましたが、現時点（2026年3月18日）では未公開です。「研究のための最低基準」の文書内にはAASの簡単な定義が記されているので、以下に引用しておきます（※用語の日本語訳は未定です）。

動物介入サービス

Animal-Assisted Services: **AAS**

特別に訓練を受けた動物を治療、教育、支援および／または緩和プロセスに組み入れた仲介、指導、もしくはファシリテーターに主導された実践、プログラムおよびヒューマンサービス。これらの活動に関わる動物の福祉を確保しつつ、人間のウェルビーイングの向上を図ることを目的とする。近年、動物介入介入（AAI）に代わる用語として提案された。AASには、動物介入治療（AATx）、動物介入教育（AAE）、および動物介入支援プログラム（AASP）の3つのカテゴリーが含まれる。

動物介入治療

Animal-Assisted Treatment: **AATx**

医療の専門家が行う精神的または身体的な治療であり、動物の直接的または間接的な関与が治療の重要な構成要素となっているもの。動物介入療法（AAT）とも呼ばれる。

動物介入教育

Animal-Assisted Education: **AAE**

進行中の教育プロセスの重要な構成要素として、動物が直接的または間接的に組み込まれている教育プログラム。

動物介入支援プログラム

Animal-Assisted Support Program: **AASP**

人間のウェルビーイングの支援および向上を目的とした活動に、動物が直接的または間接的に関与するプログラム。動物介入活動（AAA）とも呼ばれる。

動物福祉についての補足

本基準の重要な概念的枠組みとして One Welfare があげられます。One Welfare とは、人、動物、環境の福祉が相互作用をしているという考え方であり、AAS においては主に人と動物の双方の福祉を向上させることを意味します。例えば、動物が不快な状態にあると、参加者に噛みついたり、攻撃的になったりする可能性があります。逆にフラストレーションをかかえた参加者が、動物を乱暴に扱うかもしれません。関係する全ての人と動物の福祉的状态を併せて向上させることが、AAS の効果を最大化させることにつながります。

また、IAHAIO はデンバー大学の IASP (Institute for Animal Sentience and Protection) と合同で『Declaration of Animal Sentience in Animal-Assisted Services (AAS における動物の有感性宣言)』を発表しています (<https://instituteforanimalsentienceandprotection.org/>)。有感性 (sentience) とは、快楽や苦痛などの感情価を伴う意識経験をもつ能力のことです。動物を有感的な (もしくは、その可能性のある) 存在として認めることが、動物に対して福祉的配慮を求める重要な根拠となっています。

.....

以上、IAHAIO の「研究のための最低基準」について概説しました。本基準はこれだけ守れば良いというものではなく、これを出発点として、より良い研究や実践を積み重ね、そのあり方を考えるきっかけとするものです。今後の研究活動において活用されることを期待します。



2026年度 動物介在教育・療学会 第19回学術大会 開催のご案内（第1報）

謹啓

皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、「2026年度 動物介在教育・療学会 第19回学術大会」を埼玉県立大学にて開催いたします。

「多職種で創る動物介在教育・療法－共生社会へのチャレンジ」をテーマに、講演や一般演題発表を活発に展開します。医療、福祉、教育の垣根を越え、人と動物が支え合う社会の実現へ向け、専門職から学生、一般の方まで幅広いご参加を歓迎いたします

【一般演題の募集について】

学術的な「研究発表」に加え、現場の知見を共有する「実践報告」も広く募集します。最前線に立つ皆様の「実践の証」として、多職種間の新たな連携に繋がれば幸いです。また、高校生や大学生の発表も大歓迎です。若い世代の柔軟な視点や学習報告が加わることで、議論がさらに豊かになることを期待しております。

詳細なプログラムや演題登録は決定次第お知らせいたします。ぜひ今から日程確保と演題のご準備（指導教員へのご相談等）をお願いいたします。日々の活動や課題など、お気軽にお寄せください。会場で皆様とお顔を合わせ、語り合えることを心より楽しみにしております。

謹白

【開催概要】

大会名 2026年度 動物介在教育・療学会 第19回学術大会

テーマ 多職種で創る動物介在教育・療法－共生社会へのチャレンジ

会期 2026年11月7日（土）、8日（日）

会場 埼玉県立大学（〒343-8540 埼玉県越谷市三野宮 820 番地）

※交通アクセス等の会場案内につきましては、当大学ホームページ（右記 QR コード）をご参照ください。

<https://www.spu.ac.jp/access/>

大会長 押野修司（埼玉県立大学 保健医療福祉学部 作業療学科）

主催 特定非営利活動法人 動物介在教育・療学会

共催 埼玉県立大学（予定）

CLICK!



【予定スケジュール（案）】

11月7日（土）・8日（日）：第19回学術大会 両日ともに、テーマに沿った講演・シンポジウム、および皆様からの一般演題を活発に展開いたします。

【勉強会のご案内（会員限定）】

※ 大会前日の11月6日（金）に、会員限定の勉強会「埼玉県立大学ツアー」を実施いたします。保健医療福祉系大学である本学ならではの、様々な実習室や実験室などを見学して回る予定です。

※ プログラムの詳細、参加費、演題登録（一般発表）の受付開始時期などにつきましては、内容が決定次第、第2報および学会ホームページ等でお知らせいたします。

【お問い合わせ先】

2026年度 動物介在教育・療学会 第19回学術大会 事務局

担当：押野 修司 〒343-8540 埼玉県越谷市三野宮820番地（埼玉県立大学内）

TEL/FAX：048-973-4338

E-mail：oshino-shuji@spu.ac.jp

編集委員会から

『動物介在教育・療法学雑誌』に掲載される記事には、5種類があります。(1) まず、雑誌の主要なパートである「原著」です。研究によって得られた新たな知見を報告するもので、緒言・方法・結果・考察といった項目で構成されています。(2) 「短報／事例報告」は、公表する価値はあるものの、データが不十分であったり、解釈が難しかったりする場合の報告です。構成は原著に準じます。(3) 「総説」は、その分野の研究動向を総合的に紹介するレビュー論文です。(4) 「特集／講演論文」は、主に編集委員会からの依頼により執筆されるもので、学術大会の基調講演や教育講演、シンポジウムの内容を取り上げることが多くあります。(5) 「学術大会要旨」では、学術大会の要旨を一部編集して掲載しています。以上の5種類の形式の中から、原稿の内容に応じて適切な形式が選択されます。2026年6月に刊行される『動物介在教育・療法学雑誌』第17巻には、原著、講演論文、学術大会要旨が掲載される予定です。引き続き、会員の皆さまからのご投稿をお待ちしております。



投稿論文の詳細についてはこちらをご覧ください
<https://asaet.org/science/sc07/>

編集後記

先日、愛媛県立とべ動物園を訪問しました。ホッキョクグマのピースやアフリカゾウの親子で知られる動物園です。園内に掲げられていた看板には「四国のツキノワグマを絶滅から救おう」と書かれていました。近年、ツキノワグマの出没や被害の報道が増えていることを考えると、意外に感じられる内容です。しかし、説明を読むと、その理由に納得できます。日本に生息するツキノワグマ（ニホンツキノワグマ）は、遺伝的に東日本グループ、西日本グループ、四国・紀伊半島グループの三つに分かれます。このうち、絶滅の危険性が特に高いのが四国・紀伊半島グループであり、四国では現在、10～20頭しか確認されていないそうです（九州地方では1940～50年代に絶滅しています）。クマは植物を食べ、その糞とともに種子を運ぶ役割を担っていると考えられています。今号のテーマであるOne Healthの重要性を改めて感じました。（野瀬）

学術雑誌投稿論文募集中！

《投稿原稿のルール》

- ① 動物を介在させることによるヒトの健康増進・QOLの向上や教育効果に関する内容で、対象者の人権尊重と福祉に配慮し、かつ介在動物の健康や福祉にも配慮したものであること。
- ② 投稿論文は未発表かつ未投稿のものであること。英文の場合ネイティブによる校閲を受けたもの（校閲者を明記）。
- ③ 投稿論文の受理および掲載については、すべて複数の審査員による審査がある。
- ④ 本誌に掲載された論文の著作権は当学会に帰属するものとする。
- ⑤ 投稿者は当学会の会員に限る。投稿料は不要だが、規定のページ数を超えた場合、超過分は著者の負担とする。

*詳細については
学会ホームページの投稿規定をご覧ください。
(<https://asaet.org/science/sc07/>)

投稿論文は随時受付を行っています！

問い合わせ先：
inose@nvl.ac.jp（編集委員：野瀬）

動物介在教育・療学会ニュースレター

Asian Society for Animal-assisted Education
and Therapy News Letter

2026 春号 No.27

発行日 令和8年4月15日

事務局 〒210-0844
神奈川県川崎市川崎区渡田新町1-6-10

e-mail info@asaet.org

HP <https://asaet.org/>

編集者 NPO法人 動物介在教育・療学会
情報提供委員会

発行人 NPO法人 動物介在教育・療学会

発行所 NPO法人 動物介在教育・療学会

冊子制作 Shiori Tsuchida

